平成 19 年度海外研修派遣報告

山形大学医学部附属病院
伊藤由紀子

スタンフォード大学の短期研修は、予想以上に充実し、楽しいものでした。参加を申し込むにあたっては英語が一番不安要素だったのですが、講義や Workshops にも通訳の方がついてくれたため、英語に自信のない私でも十分に理解をすることができました。

今回の研修で一番期待していたことは、MRI についてです。特に、脳神経領域について新しい知識を深め、Stanford 大学における MRS や fMRI の研究についても聞くことができれば、と思っておりました。中でも 7T-MRI には大変興味を持っておりました。講義では、Atlas 先生の高磁場になり細胞レベルまで観察できるようになってきていること、Moseley 先生の睡眠状態での fMRI の研究など興味深く印象的でした。7T を実際に使用しての実習が装置故障のためできなかったことはとても残念でしたが、7T では MRI 室内に入る時はゆっくり入室すること、またガントリ内に人を入れる時もゆっくり入れないと磁場酔いすること、というのは本当 Ultrahigh field MRI であると実感しました。

診療放射線技師から見た日本と米国の違いとして一番感じたことは、すべて分業制であることでした。研究と臨床。臨床でもモダリティごとに専門の完全分業で資格があること。さらに、CT、 MRI などの 3D 作成も撮影者とは完全に別であることでした。日本のように何でもやる放射線技師とはかなり違っておりました。それに、日本と違い、全てに時間に余裕があることはとてもうらやましい環境だと思いました。医療制度の違いによることが一番大きいと思いますが、MRI でもすべて予約枠は一人最低 1 時間ということには驚きました。実際の現場はあまり見学することはできませんせしたが、病院でやっていることは日本とあまり大差がないのかなと感じました。Moseley 先生の言葉で印象的だったのが、MRI に関して言うとたいていの米国の技師はプロトコルを一切いじらないということ、プロトコルの中身をいじりたいと思う人は変わった人であると思われる、それは少し寂しいことだと思う、と。それは与えられた仕事だけをきっちりやるという米国の国民性なのだと思いました。日本のように、全てのモダリティから研究まで一人でいろいろ携われることは、それはそれでよいことだとは思いますがやはり時間的余裕がなくなる理由であると思います。

セミナーで最も印象に残ったことは、Gambhir 先生の分子イメージングの将来についての講義でした。全くこれまで聞いたことのないお話で、将来は光を使ったイメージングが多くでてくる、ということは大変興味深いものでした。Stanford 大学では本当に最先端の研究も行われているということを実感しました。

セミナー以外で印象に残っていることはたくさんありますが、昼食や Wine/Cheese Reception で Stanford の先生や技師の方と交流が持てたことがとてもよかったと思います。乳腺 MRI で有名な Debra Ikeda 先生とお話ができたこと、MRI 技師の Teresa さんとお話できたことがとてもよかったです。Teresa さんには米国では女性技師が多いですが、結婚・出産等で仕事をするのは大変ではないですかという質問に対し、全く問題ないわよ、という答えで、お国柄、制度も全く違うせいもあるとは思いますが、同じ女性としてとても頼もしいと感じました。この交流では、自分がもっと英語が話せればいろいろと質問できたのに、と悔いが残ってしまいました。

今後も是非この海外研修を継続していただき、多くの方に参加していただきたいと思います。1 週間という短い期間だったため、スケジュールに余裕がなくもっと時間を割いてほしいところもありましたが、結果としてはとても満足のいくものでした。あえて言うならば、興味のある分野ごとに分かれた実習等があれば、よりよかったと思います。

最後になりますが、彩都友鉱会病院の福西さんはじめ同行してくださった GE の方々、そして今回の研修の計画に携わってくださった皆さんに感謝をしたいと思います。本当に充実してよい研修でした。

写真：Moseley 先生と Lucas center の RT(MRI)の Sandra さんと一緒に